十五日脇坂淡路守殿行年三十四歳を云て逝去し給ふ我
娘生家なれば殊に哀れ深く侍る敷淺うして大関の方深き
御事なれば為後世長く思ひ入れ給ふ故に御法を尋ね給ひて
漸く法を尋ね出し給ひ此度御場く今迄よ
て討ち参らせ給ふ姫君の御遺の往生を祈り給ひ家門の繁昌
源をきる御院の刹土なるべきの行く立つの陰あるべきを大関を
主君の厚深なられ給ふと申えけり書しく小原宗物
語ふ云ふ三アが心を進加へ者也

家康公奥羽御進発之事

寺社上杉中納言景勝の領国会津若松の城に引籠り上
洛を云て事新に御代りて江戸内大臣家康公
御勢の命を受て東国へ御進発ありし慶長五年六月
十五日に出馬し給ふ敵方の諸将石田治部少輔三成
御方にて一日逗留遊ばされ給ふ所に武州忍城の
門前近所に御陣内長谷堂の府内市部兵庫頭
に御宿を居給ふ所へ下野の国小山迄御出馬
徒長盛文道有安宗四郎左衛門尉長束大蔵大輔
国入を深く心を異にる事陸奥道を御弾有馬法下る息玄